遠野物語

遠野物語

三百五十部ノ內 第一六六號

明治四十三年六月十一日印刷
明治四十三年六月十四日發行　（實價金五拾錢）

不許複製

著者兼發行者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町三丁目六十番地　柳田國男

印刷者　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十三番地　今井甚太郎

印刷所　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十三番地　杏林舍

賣捌所　東京市本郷區龍岡町三十四番地（振替口座東京三〇五八八）（電話下谷一六七二番）　聚精堂

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年9月

此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね來り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠實なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。思ふに遠野郷には此類の物語猶數百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。國内の山村にして遠野より更に物深き所には又無數の山神山人の傳說あるべし。願はくは之を語りて平地人を戰慄せしめよ。

此書の如きは陳勝吳廣のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花卷より十餘里の路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人

煙の稀少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。或は新道なるが故に民居の來り就ける者少なきか。遠野の城下は則ち煙花の街なり。馬を驛亭の主人に借りて獨り郊外の村村を巡りたり。其馬は黠き海草を以て作りたる厚總を掛けたり。虻多き爲なり。猿ケ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸國其比を知らず。高處より展望すれば早稲正に熟し晩稲は花盛にて水は悉く落ちて川に在り。稲の色合は種類によりて樣々なり。三つ四つ五つの田を續けて稲の色の同じきは卽ち一家に屬する田にして所謂名處（ミヤウショ）の同じきなるべし。小字より更に小さき區域の地名は持主に非ざれば之を知らず。古き賣買讓與の證文には常に見ゆる所なり。附馬牛の谷へ越ゆれば早地峯の山は淡く霞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

み山の形は菅笠の如く又片假名のへの字に似たり。此谷は稻熟すること更に遲く滿目一色に靑し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて橫ぎりたり。雛の色は黑に白き羽まじりたり。始は小さき雞かと思ひしが溝の草に隱れて見えざれば乃ち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。玆にのみは輕く塵たち紅き物聊かひらめきて一村の綠に映じたり。獅子踊と云ふは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六人劍を拔きて之と共に舞ふなり。笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞き難し。日は傾きて風吹き醉ひて人呼ぶ者の聲も淋しく女は笑ひ兒は走れども猶旅愁を奈何ともする能はざりき。盂蘭盆に新しき佛ある家は紅白の旗を高く揚げて魂を招

く風あり。峠の馬上に於て東西を指點するに此旗十數所あり村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入り込みたる旅人と又かの悠々たる靈山とを黄昏は徐に來りて包容し盡したり。遠野郷には八ケ所の觀音堂あり。一木を以て作りしなり。此日報賽の徒多く岡の上に燈火見え伏鉦の音聞えたり、道ちがへの叢の中には雨風祭の藁人形あり。恰もくたびれたる人の如く仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

思ふに此類の書物は少なくも現代の流行に非ず。如何に印刷が容易なればとてこんな本を出版し自己の狹隘なる趣味を以て他人に强ひんとするは無作法の仕業なりと云ふ人あらん。されど敢て答ふ。斯る話を聞き斯る處を見て、來

て後之を人に語りたがらざる者果してありや。其樣な沈默にして且つ愼深き人は少なくも自分の友人の中にはある事なし。況や我が九百年前の先輩今昔物語の如きは其當時に在りて既に今は昔の話なりしに反し此は是目前の出來事なり。假令敬虔の意と誠實の態度とに於ては敢て彼を凌ぐことを得と言ふ能はざらんも人の耳を經ること多からず人の口と筆とを倩ひたること甚だ僅かなりし點に於ては彼の淡泊無邪氣なる大納言殿却つて來り聽くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至りては其志や既に陋且つ決して其談の妄誕に非ざることを誓ひ得ず。窃に以て之と鄰を比するを恥とせり。要するに此書は現在の事實なり。單に此のみを以てするも立派なる存在理由ありと信ず。唯鏡石子

は年僅に二十四五自分も之に十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生れながら問題の大小をも辨へず。其力を用ゐる所當を失へりと言ふ人あらば如何。明神の山の木兎の如くあまりに其耳を尖らしあまりに其眼を丸くし過ぎたりと責むる人あらば如何。はて是非も無し。此責任のみは自分が負はねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ
笑ふらんかも

柳田國男

題目

（下の數字は話の番號なり頁數には非ず）

地勢　一、五、六七、一一一

神の始　二、六九、七四

里の神　九八

カクラサマ　七二—七四

ゴンゲサマ　一一〇

家の神　一六

オクナイサマ　一四、一五、七〇

オシラサマ　六九

ザシキワラシ　一七、一八

山の神　八九—九一、九三、一〇一、一〇七、一〇八
神女　二七、五四
天狗　二九、六二
山男　五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二
山女　三、四、三四、三五、七五
山の霊異　三三、三三、六一、九五
仙人堂　四九
蝦夷の跡　一一二
塚と森と　六六、一一一、一一三、一一四
姥神　六五、七一
館の址　六七、六八、七六
昔の人　八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家のさま　八〇、八三
家の盛衰　一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三
マヨヒガ　六三、六四
前兆　二〇、五二、七八、九六
魂の行方　二三、八六―八八、九五、九七、九九、一〇〇
まぼろし　二三、七七、七九、八一、八二
雪女　一〇三
河童　五五―五九
猿の經立（フッタチ）　四五、四六
猿　四七、四八
狼（オイヌ）　三六―四一
熊　四三

狐　六〇、九四、一〇一
色々の鳥　五一―五三
花　三三、五〇
小正月の行事　一四、一〇二―一〇五
雨風祭　一〇九

遠野物語

一　遠野郷は今の陸中上閉伊郡の西の半分、山々にて取圍まれたる平地なり。新町村にては遠野、土淵、附馬牛、松崎、青笹、上郷、小友、綾織、鱒澤、宮守、達曾部の一町十ヶ村に分つ。近代或は西閉伊郡とも稱し、中古には又遠野保とも呼べり。今日郡役所の在る遠野町は卽ち一郷の町場にして、南部家一萬石の城下なり。城を横田城とも云ふ。此地へ行くには花巻の停車場にて瀧車を下り、北上川を渡り、其川の支流猿ケ石川

○遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖といふ語より出でたるなるべし、ナイもアイヌ語なり

○この一里は小道卽ち坂東道なり、一里が五丁又は六丁なり

○タツソベもアイヌ語なるべし岩手

の溪を傳ひて、東の方へ入ること十三里、遠野の町に至る。山奥には珍らしき繁華の地なり。傳へ言ふ、遠野郷の地大昔はすべて一圓の湖水なりしに、其水猿ケ石川と爲りて人界に流れ出でしより、自然に此の如き邑落をなせしなりと。されば谷川のこの猿ケ石に落合ふもの甚だ多く、俗に七内八崎ありと稱す。内は澤又は谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

二

遠野の町は南北の川の落合に在り。以前は七七十里とて、七つの溪谷各七十里の奥より賣買の貨物を聚め、其市の日は馬千匹、人千人の賑はしさなりき。四方の山々の中に最も秀でたるを早地峯と云ふ、北の方附馬牛の奥に在り。東の方には六角牛山立てり。石神と云ふ山は附馬牛と達曾部

郡玉山村にも同じ大字あり

○上郷村大字來内、ライナイもアイヌ語にてライは死のことナイは澤なり、水の靜かたるよりの名か

との間に在りて、その高さ前の二つよりも劣れり。大昔に女神あり、三人の娘を伴ひて此高原に來り、今の來内(ライナイ)村の伊豆權現の社ある處に宿りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を與ふべしと母の神の語りて寢たりしに、夜深く天より靈華降(フ)りて姉の姫の胸の上に止りしを、末の姫眼覺(サ)めて窃に之を取り、我胸の上に載せたりしかば、終に最も美しき早地峰の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神各三の山に住し今も之を領したまふ故に、遠野の女どもは其妬を畏れて今も此山には遊ばずと云へり。

○土淵村大字栃内

三

山々の奥には山人住めり。栃内(トチナイ)村和野(ワノ)の佐々木嘉兵衞と云ふ人は今も七十餘にて生存せり。此翁若かりし頃獵をして山奥に入りしに、遙かなる岩の上に美しき女一人あ

○土淵村大字山口、吉兵衛は代々の通稱なれば此主人も亦吉兵衛ならん

りて、長き黑髮を梳りて居たり。顏の色極めて白し。不敵の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに、彈に應じて倒れたり。其處に馳け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黑髮は又そのたけよりも長かりき。後の驗にせばやと思ひて其髮をいさゝか切り取り、之を綰ねて懷に入れ、やがて家路に向ひしに、道の程にて耐へ難く睡眠を催しければ、暫く物陰に立寄りてまどろみたり。其間夢と現との境のやうなる時に、是も丈の高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの綰ねたる黑髮を取り返し立去ると見れば忽ち睡は覺めたり。山男なるべしと云へり。

四　山口村の吉兵衛と云ふ家の主人、根子立と云ふ山に入り、笹を苅りて束と爲し擔ぎて立上らんとする時、笹原の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com